

創立百三十六周年記念式典 校長式辞

天高く馬肥ゆる秋、山肌もカラフルに染まり、私たちの目を楽しませてくれます。まだまだ感染症の不安が拭いきれない中ですが、高橋同窓会長様、佐藤PTA会長様はじめ多数のご来賓のご臨席を賜り、本日ここに山形県立山形東高校高等学校創立百三十六周年記念式典を挙げていくことは、この上ない喜びであります。

さて、大正十三年、土井晩翠作詞による本校校歌の二番に、「来たるを続けて遠きにいたし」と歌われていますが、これまで母校が歩んできた足跡をたどり、先人たちがどのような思いを持って、時には困難を乗り越え、栄光の歴史を築き上げてきたのかを振り返ることは、皆さんがこれから進むべき道を見定める上で、大変意義深いことであると考えます。創立記念日に当たり、その一端についてお話ししたいと思います。

山形県が設置する初めての中学校が産声を上げたのは明治十七年のことでした。財政難の折、独立校舎を建築する予算が獲得できなかったため、小学校教員養成機関として既に設立されていた山形県師範学校に併置し、教員も校長以下ほとんどが、師範学校の教員が兼ねるという体制でのスタートでした。それでも、十月二十九日、当時の文部卿らのご臨席のもと、入学生五十四名を迎えて開校記念式典が賑々しく挙行されました。旧制中学校の入学資格は年齢十二歳以上で、修業年限は五年でしたので、今で言えば中学校一年生から高校二年生までの生徒が学んでいたことになります。

当時の師範学校は、旧県庁前に立つ洋風の壮麗な建物でしたが、その片隅を間借りしての運営は大変窮屈であったため、明治十九年十月、不要となっていた師範学校の寄宿舎を改造し、中学校の独立校舎としたのでした。しかし、この改造校舎も狭隘で運動場などの設備も不十分であったため、明治二十年に就任した第六代梅野校長は、新校舎建築の必要性を熱心に説き、寝食を忘れて尽力し、明治二十三年末、ついに県議会の理解を得て、当時「千歳園」と呼ばれていた公園に、移転新築することが決まりました。本校正面玄関前のロータリーに立つ記念碑がこの歴史を物語っています。梅野校長は移転決定の数日後、病により三十二歳の若さで逝去されましたが、その功績を長く讃えるため、遺族により寄贈された蔵書が「梅野文庫」と名付けられました。今も図書館には梅野校長の肖像画が飾られています。

明治二十六年九月に念願の新校舎が完成し、新たな地での学校運営が始まりましたが、わずかその四年後の明治三十年六月、放火による火災で寄宿舎を除く全校舎が焼失してしまいます。二年後に第二代新校舎が再建されましたが、その十二年後の明治四十四年五月八日、植木市が開かれていた日、市北部の大火により再び本校校舎が失われてしまいます。それでも大火から一週間後の十五日には、劇場などを借り受けて仮教場として授業を再開します。授業開始に先立ち、第十五代久保校長は全校生の前で「校舎は焼けても本校の精神は滅んでいない。教場は仮でも、決して仮の教育はしないぞ。」と叫んで、一同「山形県立中学校万歳」を力強く三唱したと記録されています。同じ大火で県庁舎も焼失していましたが、県庁の復旧にも先立って中学校校舎の再建が図られ、大正元年十二月、現地移転後第三代目の校舎が完成します。

さて、本校の校是の一つである「質実剛健」は、飾り気がなく誠実で真面目な様を表していますが、そのルーツをたどってみると、明治四十一年に天皇より発せられた「戊申詔

書」にあるようです。この中に、日露戦争後の社会の乱れを正すため、国民の有り様として、質素を重んじ勤勉であり続けなければならないと述べられており、これをとある新聞記者が「質実剛健」という言葉で表したという説があります。大正元年に本校に着任した第十六代三根校長は、十項目の教育方針を掲げており、その一つに「質実剛健の気風の養成」がありました。なお、その他の項目を見ると、「世界的な視野」、「科学的研究心」、「独創的発明的精神」など、現代においても育成すべき資質として重要視されているものが含まれていたことは注目に値します。大正時代の本校は、学業の傍ら全校マラソン大会や雪中行軍などの行事を通して質実剛健の気風を養う一方で、大正デモクラシーを背景として、秩序ある自由主義の校風が形成されたと評されています。私は今後もこの校風は是非継承していくべきものであると考えております。

もう一つの校是である「文武両道」もこの時代に確立されていきます。「文」については、大正九年八月、旧制山形高校、今の山形大学が本校の一部を仮校舎として誕生したのを機に、上級学校への進学熱が急速に高まったと記録されています。また、「武」については、従来からある柔道・剣道・野球に加えて、大正末期から昭和にかけて近代スポーツの導入が盛んに行われ、箏球部が全国で準優勝、庭球部が優勝を飾るなど、全国に山形中学の名を轟かせました。また、野球部は昭和十一年から四年連続で甲子園出場を果たしています。

このような栄光の一方で、昭和十六年、太平洋戦争が勃発、戦局が悪化するにつれて学徒動員により授業の実施もままならず、昭和二十年の四月からは一年間の授業停止の指令が下ります。そのような中であっても、松木清教諭は、「山中生たるもの勉学を疎かにしてはならぬ」ということで、四年生の動員先である山形航空で生徒にプリントを配り、集会所の暗い電灯の下で、当時敵性語とされていた英語の授業を行ったという逸話が残っています。

戦後の学制改革により、昭和二十三年度から旧制山形中学は山形第一高等学校となります。その二年後の昭和二十五年には、GHQの強い指導により男女共学の推進のため、今の山形北高等学校である山形第五高等学校と統合し、山形東高等学校と命名されました。しかし、二つの校舎を使用しての学校運営には様々な支障があることから、二年後の昭和二十七年には早くも統合は解消され、現在に至ります。その間も、山形東高校の文武両面にわたる躍進が続くわけです。

さて、大正元年に完成した校舎は創立百周年にあたる昭和五十九年に現在の校舎が完成するまでの長きにわたって使われました。先程お話した正面玄関前ロータリーの「千歳園」の記念碑の隣には、「槌音会」と印された石碑があります。この「槌音会」は、実は私が所属した学年の卒業会名です。その会名には、校舎改築の工事の音を聞きながら授業を受け、とうとう新校舎に入ることなく卒業の日を迎えた学年という意味が込められています。私自身、山東祭のクラス企画であるお化け屋敷の受付をしながら、パワーショベルがわずか二、三時間で、約七十年にも及ぶ歴史を持つ講堂を破壊し尽くすのを眺めていたことを今でも鮮明に記憶しています。そして今私たちがいる講堂は、創立百周年記念事業として同窓会が建築し、山形県に寄付していただいたものです。

このように、連綿と続く山形東高校の歴史の中で、先輩諸氏は幾多の困難を乗り越えながら、数々の栄光を築いてきました。今年は三ヶ月近くに及ぶ臨時休校という試練もありましたが、私たちは今、その礎の上で充実した学校生活を送っています。私たちにはこの

栄光の歴史とその中で育まれた普遍の価値観を次の世代にしっかり引き継ぐ責務を負っています。しかしこれは、時代が変化する中で、伝統の上に甘んじて座していて成し遂げられるものではありません。先輩諸氏の不屈の精神を見習い、「不朽の勲」を残すべく、挑戦し続けることを心に誓い、校長式辞といたします。

令和二年十月二十九日
山形県立山形東高等学校
校長 須 貝 英 彦